



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュ・スレタ - No.112

2006年7月

クリスチャンとして歩み始めて

コルネリオ会 会員 山本由美

「救われるって何？人の命を助けてくれるってこと？クリスチャンになる前はそう思っていたわ。」という友達がいました。まさに私の感覚と同じでした。私もクリスチャンになる前までは自分の気持ちを優先し、自分の直感が正しい、自分の思ったとおりに進むことが美德だ・・・と自分勝手に思うままに生きていました。しかしそれは反面、自分の殻の中に閉じこもるということでもあり、自分が思い悩んで立ち止まったときは誰にも相談できず、暗闇の中をさまようというようなことを繰り返していました。

そんな私がキリスト教と出会ったのは、主人がクリスチャンだったからでした。しかし、クリスチャンの主人からは「教会に行ってみない？」とかキリスト教について積極的に教えるということは決してありませんでした。そんな彼の態度に興味をもったのはむしろ私のほうでした。またその頃タイミングよく当時私が住んでいた町で久米小百合さん（「異邦人」を歌った久保田早紀さんのこと。）のコンサートが開かれるのをたまたま知り、彼女がクリスチャンであることやそのコンサートがゴスペルコンサートであることも知らなまま一人でそのコンサートに出かけていきました。私ははっきり「異邦人」等の歌謡曲を歌うのかと思いついていましたが結局そういう雰囲気には全くならず（当たり前です、ゴスペルコンサートなのですから）それどころか、会場では一人一人が「お祈り」を捧げる状況になりました。私はどうやって祈ったらいいのかも分からず、周囲の視線に怯えながら、とりあえず手を組んでうつむいているだけの似非クリスチャンでした。しかし、私にとっては、彼女の澄んだ声と優し

い歌詞が印象に残り、冷えていた心に明かりを灯されるようなコンサートでした。後日、同じ部隊でクリスチャンの方にこの話をしたところ、ノンクリスチャンの私がそういうことに興味があるのを不思議がっていましたが、「あまり職場では話さないのだけれど・・・」と言いながら色々と自分のクリスチャン生活の話をしてくださいました。その方はとても温厚でまた信頼できた方なので、仕事の相談や世間話などをしに何度も職場を訪れましたが、やはり彼も絶対に「クリスチャンになったら」とは勧めませんでした。

あまり勧められないと、かえって気になってしまうものです。ある時私は思い切って主人に「教会に行ってみよう」と告白しました。これを機会に私達の教会巡りが始まりました。当時クリスチャンでない私にとって教会はどこでも一緒だと思っていましたが、教会といっても様々な教派があり自分にあった場所を見極めたほうが良いという主人の意見で、毎週違う教会の聖日礼拝に行くことになりました。現在私が住む町の殆どどの教会を訪ね歩いたのですが、主人は首を縦には振ってくれませんでした。「私の行く教会は見つからないのかしら？」と半ば諦めていた時、市内にある教会の中では多分最後となる教会を訪ねていったのは日曜日のそれも12時30分を過ぎたころでした。そこは教会といっても教会堂ではなく集会場みたいなところで、どうも今までに行った教会とは違う、それも何だかワイワイ賑やかな雰囲気・・・そこへ出迎えてくれたのが現在ミニチャーチ（家庭集会）と一緒に活動しているメンバーの一人と、そしてアメリカ人牧師婦人でした。突然訪ねていく人は珍しいらしく、英語と

日本語で話しかけられました。その教会の牧師は米海兵隊出身の元軍人であるということ、私の勤務している部隊の英語講師の方もこの教会員であるという、自衛官の私にとっては運命とも思える偶然が重なったことで私達は直ぐにその場所に馴染むことができました。主人もこの教会が以前通っていた教会と雰囲気が似ているということで、惹かれるものがあったらしく、私よりも会話（英会話）が弾んでいました。なぜか安心した私は翌週から自然とそこの礼拝に参加するようになりました。この教会が今まで見てきた教会と違っていたのはなんといっても、賛美の方法です。厳かな賛美歌とは違い、ステージにはヴォーカリスト、ギター、ドラム、ピアノを中心とした賛美チームによるワーシップソングの演奏する曲はPOPで、また、その歌詞の意味は理解しやすいため受け入れやすく、直ぐに私の心に響きました。歌っている最中に体の中から熱いものがこみ上げるとともに涙がとめどもなく溢れ出てきました。泣いている私を見た人が「遠慮しないでもっと涙を流さない。その涙が体を浄化してくれるのよ。」と背中を押してくれた時、更に体中が清められていく感覚を得るとともに私のかたくなな心を直ぐに

開放してくれました。

そして教会に通いだして2ヶ月後、私はミニチャーチの集会の中で「イエス様を受け入れます」と告白することができました。告白後はミニチャーチのリーダーの指導の下、聖書の学びのための個人的なフォローアップ訓練を受けながら半年後には聖霊のバプテスマを受け、そして昨年11月に水のバプテスマを受けました。そして今私は、イエス様に生かされて、用いられているということを心と体の全部から表現できるようになりました。

教会との出会いから洗礼までは1年にも満たない短い期間だったので聖書の知識も充分身につけていないため具体的な御言葉を引用して証しを申し上げることができないのは少し残念ですし、悔しい気はしますが、イエス様を信じ、その御心に従う気持ちさえあれば、御霊の賜物を受けることができ、いつか自分自身も御霊の実を結ぶことができると信じています。夫婦ともにクリスチャンになれたということでこれからは神の道を歩んでいくことを誓うとともに、この喜びを二人で多くの人に伝えていきたいと思います。

(空自 静浜基地)

聖書に学ぶリーダーシップ(その5)

サーヴァント・リーダーシップ(イエスの愛が為された事から学ぶ)

コルネリオ会 会員 伊藤忠臣

1. 概要

(1) 定義

イエスが伝道された30年間の奇跡の数々は、創造力の証し、神の子イエスの権威の証しで、それは「民衆のニーズを汲み取りそれに応える」ことがリーダーの務めである事を教えています。防衛大では「リーダーシップとは他人に対し、服従、信頼、尊敬、及び忠実な協力を要請しこれを受け取る事を意味している(その1参照)」と、学生が40年の学生舎生活を通じて築く人間関係と研鑽すべき人格面を強調しています。一方現役軍人にとっては部隊(集団)を統率して、与えられた任務をいかに効率よく達成するかと言う「人間関係」と対である「任務達成意欲(task)」が重要です。この2つは実はリーダーシップの原動力なのです。軍隊では階級による(俗称ピラミット)権力構造が当然

有効とし通用してきました。しかし任務達成に必要な命令遵守的效果があっても人間関係とのバランスが時間経過とともに減衰する場合があります。そこで古今東西最も偉大なリーダーであるイエス・キリストが十字架にいたる伝道の道筋の諸所において、イエスが民衆を導かれた愛の行為(リーダーシップ)を模範にして定義すると「皆(民衆)に共通の正しいと認識されたゴール(健康や幸福)に向かい人々が精を出して働くように影響(愛が為せる行為)を与えるスキル(神の証し)」と言う事が出来ます。

‘スキル’つまり‘単に習って身につける能力’との意義付けは、リーダーが権力(階級)ではなく、人々に影響を与えること(人格・識見等から生ずる行動)で人々を導く能力を磨くという重い責任を自覚し、日々実行することが要請され研鑽し習熟すれば立派なリー

ダーになれるということが出来ます。

(2) 人々に影響を与える行為

愛の讃歌Ⅰコリント13章です。13節では‘愛’が至上であることを謳い、さらに4-7節を‘愛が為す事’として読み解くと、忍耐、思いやり、謙虚、敬意、無私、寛容、誠実、献身、などリーダーが具備すべき人格的要素が抽出できます。‘愛が為す事’と読み解く理由は、聖書の原語、ギリシャ語の‘愛’が意味することを重視したからです。英語の‘ラブ’とは異なりギリシャ語では、‘エロース’(性的誘引による感情)‘ストルゲー’(家族愛)‘フィリア’(親友愛)そして‘アカーベ’(差別のない行為の基となる無条件の愛)と4つを使い分け、イエスが‘愛’と言う時はこの‘アカーベ’が使われており行為を選択する愛であって感情の愛ではないのです。つまり私たちは他人に対する感情をコントロールしにくいのですが、他人に対する行

動は‘意志’を強く持ってコントロールできます。

隣人が気難しくて好きに慣れなくても愛情を込めて振舞えるよう修養できます。

隣人の態度が悪くてもそれに耐えて誠実に敬意を払うよう振舞う修養はできます。

従って我々も‘アカーベの愛’が示す人格的要素を身に付け、スキルに習熟すれば人々に影響を与える事ができるということです

参考；米軍の最新の野外令の‘あるべき人格’は「忠誠、義務、尊敬、献身、名誉、誠実、勇気、服従の心、について世界各地で行動する軍人のリーダーシップは、人種的・民族的宗教的・文化的・性別的なバックグラウンドの差に寛容と尊敬を払わねばならぬ」と規定しています。

(次回に続く)

戦争について考える(その6)

コルネリオ会会員 足立順二郎

4. 軍隊

もともとそうだとは思っていたが、最近小泉総理が「自衛隊は軍隊」と聞き取れる発言があったので、この稿では自衛隊と軍隊とを区別しないで書いて行く。吉田総理が「自衛隊は軍隊ではありません」といったことと思えば隔世の感がある。

(1) システム

軍隊というものは国家防衛という明確な目的を持った一種のシステムである。組織構成員運用などに関する各種規則類や装備品類などなど各種のハードウエアソフトウエアからなる一種のシステムである。

(2) 集団

他の集団も同じことだが、軍隊には組織も編成も構成員も階級もある。軍隊を運用する計画もある。

それらの根拠となる法令もある。

もちろんリーダーがいる。最高指揮官は国家元首あるいは総理大臣である。

軍隊というものは、つまるところは、暴力集団である。警察もまた同じ。しかるべき暴力手段つまり兵力を保持しこれを運用する。これらが市井の暴力団と異なるのは、国の法律によって作られ運用されるという

点である。

軍隊と警察との違いは、戦う相手が違うことである。軍隊の相手は敵国軍隊である。警察の相手は犯罪者である。

構成員もまた異なる。軍隊の構成員の大部分は軍人である。警察の構成員の大部分は警察官である。軍人については後述する。

(3) 任務

軍隊の主任務は国家防衛である。上述の汚くない戦争に従事するのが主任務である。戦争でなくても大惨事大災害などに対しては持っている力を利用して国民の救助に当たる。

軍隊の平時における主任務は訓練である。このことは一般に理解されていることが少ない。軍隊は存在するだけでは何の役にも立たない。訓練が十分であってはじめて戦争ができるし、大惨事大災害などに対処することができる。

一に訓練二に訓練三四がなくて五に訓練である。

訓練は、個々の軍人の資質(精神力、体力、技術力などすべてを含む)を向上する訓練からはじまり、グループとしての訓練があり、最大のものとしては全軍をあげ

て行う実働を伴う攻防の演習がある。

(4) 出兵・戦争・戦闘の準備

軍隊はいろいろ準備がないとすぐには動けない。そのためにはいろいろな準備が必要でそれには段階がある。私は海軍軍人だったので海軍を例にとって考える。これから戦をやろうと心を決めたら、兵力整備を行わなければならない。出師準備である。

日清戦争のあとで、三国干渉があった。明治28年(1895年)のことである。当時の我が国の兵力ではどうしてい仮想敵国ロシアに対抗することはできない。どうしてい話にならない。臥薪嘗胆で軍艦を買ったり兵器を買ったりがはじまる。訓練も猛訓練となる。このレベルの準備が出師準備だったと思う。

私が海軍経理学校に入校したのが昭和12年(1937年)。29期生徒であった。この年に生徒の数が増えた。26期20名、27期と28期はそれぞれ25名であったものが、29期生徒は30名となった。もちろん海軍兵学校海軍機関学校の生徒数も比例して増えた。それだけでなく、予備艦が聯合艦隊に編入された。つまり現役となった。同型艦4隻あったら、2隻は予備艦2隻は聯合艦隊という予算配分だったものが4隻とも聯合艦隊に配属されたのである。海軍予算も大いに増額された。6億5千万円になったと聞いている。ここら辺が対米戦争を本気に考えた準備のはじまりだったのではあるまいか？

いよいよ戦がはじまってこれから出港するぞとなると、船のなかには燃えるものいろいろあるし、戦にはすぐには必要ないものもある。そこでそのようなものを全部陸揚げしてしまう。もちろん燃料弾薬食料は満載、弾薬にはすべて信管装着必要な調整はすませる。このレベルの準備が臨戦準備である。

出港して戦域に到達し、これからチャンバラを始めるといいう予令が合戦準備である。この状態になって後はじめてチャンバラの号令がかかって対水なり対空なりの戦闘がはじまるのである。

(5) 有事即応

ところがこんな悠長なことをやっていたのでは、とてもじゃないがこのめまぐるしい世の中の戦争に追いついて行けるかという問題がおきる。

そこで軍隊の最高指揮官がやるぞと決心したらすぐさ

ま武力を行使できるようにあらかじめ法律上の問題を含めて万全の対策を行っておく必要がある。世界各国の軍隊はこの考え方を採っていると思う。我が国の自衛隊もこの考え方を採っている。ことに民主主義国家においてはあらかじめ法律上の問題点をクリアしておかなければならない。独裁国家とは違う。

艦艇についていうならば、修理中とか錬成訓練中の艦艇を除いて、燃料弾薬(信管装着済み)食料満載、乗員の練度十分、この考え方が有事即応である。

ところがこれを実行しようとするといろいろな問題点がおきるのである。末端の技術上や予算上やその他諸々の付随的事項が起きるのである。

たとえば、機雷。いつでも敷設できるようにするためには(つまり有事即応ということだ)炸薬を装填しておかなければならない。ところが機雷というものは図体が大きいので、炸薬の装填していない缶体だけだったら普通の倉庫に格納できるが、装填してしまったら弾庫に入れなければならない。全部装填してしまったら弾庫に入りきれない。おまけに炸薬を装填するにはけっこうな日数がかかる。「機雷は戦略兵器だから炸薬未装填のまま通常倉庫に保管しておいてそれでいいんだ」と本当に言い切れるのだろうか？

現場にいた一自衛官として本当にこれで有事即応できるのかと思ったことは幾たびもあった。

我々が現役だった頃の自衛隊は「創る自衛隊」(兵力整備中の自衛隊)だったが、現在は「働く自衛隊」(兵力整備を一段落して実働する状態にある自衛隊)だと聞いたことがある。本当にそうであることを祈るのである。

(6) 仮想敵国

どのような脅威から我が国を守るかということを考えなければ、兵力整備も訓練も計画の立てようがない。当然のことながら、仮想敵国というものがある。ただ名指ししないでA国とかB国とかいうだけのことである。アメリカのオレンジ計画だって、「オレンジ」は日本のことだった。

ところが、我が国では仮想敵国などというのはけしからんという風潮があった。今でもあるかもしれない。かつて自衛隊が「三矢研究」という研究作業をやったことがあった。その時「仮想にしても敵国とはなんだ」

と政治家マスコミ総出になって自衛隊を叩いた。妙な
ことだ。

(7) 軍隊を保有する 目的

「10年兵を養うはただ1日これを用いんがためなり」という言葉がある。確か秋山真之中将(日露戦争当時の聯合艦隊参謀)の言だったと思う。思うと書いたのは原典に当たって確認していないからである。私は現在では、「10年兵を養うはただ1日もこれを用いざらんがためなり」と思っている。

軍隊は戦争抑止のためにあると考えている。

5. 軍人

(1) 軍人

軍隊の構成員の大部分を占める。

以下我が国の自衛隊と外国の軍隊とが別々に論じられたり、個別に論じられたりする。時々の文脈による。

自衛隊を例に取ると、自衛官が軍人に当たる。

軍人はもっぱら目に見える戦闘行為にかかわる。

軍隊には軍人以外の多くの構成員がある。内部部局の構成員である文官、主として事務にかかわる事務官、もっぱら技術的な業務にかかわる技官などである。軍人以外を一般にシビリアンと言いつつ、彼らは直接には戦闘行為にはかかわらない。しかし、軍人は彼らとは異なる。

軍人は命令があったら、たとえ戦死の可能性があっても弾の降ってくる戦場に赴かなければならない。こういう仕組みになっている。死にたくなくてもだ。命令に逆らうことは出来ない。抗命は罪である。敵前逃亡は罪である。後発港期(出港時刻に後れること)は罪である。ともに戦時には死刑を伴う罪である。世界中の軍人はこういう仕組みのもとで働いている。このことはあまり知られていない。殊に日本人は知らない。自衛官の家族だって知らない人が多いと思う。自衛隊を運用している政治家たちだって本当に分かっているか否かは疑わしい。

(2) 軍隊の最高指揮官とスタッフ

軍隊の最高指揮官は国家元首あるいは総理大臣である。軍人ではないことが多い。

大変妙な表現になるが、軍隊の最高指揮官(つまり国家元首とか総理大臣)は「進め進め兵隊進め！」とはいう。

つまり出兵の命令は出す。軍隊運用の命令は下す。しかし、決して自ら弾の降ってくる戦場には赴かない。そういう建前になっている。そういう仕組みになっている。

軍人は「進め進め兵隊進め！」と命令されたら弾の降ってくる戦場に赴かなければならない。命の保証はない。これも原則である。

だから、最高指揮官(あるいはそのスタッフ)に軍人としての経験がないならば、軍人は命令を受けたとき違和感を感じざるを得ない。いくら軍人としての身分とか使命について理解と覚悟を持っていたにしてもである。幸いにして、現在の身分が軍人でないにしても、軍人としての体験がある人が最高指揮官になったら、この違和感は軽減されるか解消する。

これは帝国海軍軍人であった経験と海上自衛官であった経験とを比べ併せてそう思うのである。「朕は汝等の大元帥なるぞ」というインパクトは海上自衛官時代にはなかった。(軍人勅諭の実際の文言は「朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首として仰ぎてぞ、その親しみは特に深かるべき」だったと記憶している。)戦後歴代総理大臣のうち、軍人であった体験を有したのは中曽根総理だけだったと記憶している。

大東亜戦争のはじまる直前の駐米大使は野村提督であった。戦後防衛庁ができた際に防衛庁長官に擬せられたことがあったという。しかし実現しなかった。崇文蔑武(注参照)の空気がありはしなかったか？

(注)「すうぶんべつぶ」と読む。文事あるいは文官を尊崇し、軍事あるいは軍人をさげすむこと、李朝にあった気風といわれる。また、建武中興が失敗に終わる頃楠木正成が湊川で戦死しているのだが(1336年)、我が国にも崇文蔑武の思想があったのではあるまいか？現在の我が国にもありはしないか？
(次回に続く)

2006年度 総会報告

6月3日(土)～4日(日) 霞ヶ浦湖畔の県立研修所で2006年度コルネリオ会総会が実施されました。2005年度の活動報告・会計報告と2006年度の活動計画・予算計画及び役員人事の審議がありました。

また、2005年度の活動計画、役員人事、会計決算及び予算は以下のようになっています。異議のある方は会宛て1ヶ月以内に申し立ててください。

2006年度コルネリオ会活動計画および担当者

1 全般

2005年度のアジアインタラクシヨンの成果を踏まえ、自衛隊宣教の進展とコルネリオ会員の霊的な成長を図り主の栄光をあらわす活動とする。

(1) 例会のあり方

ア 事務的事項は、新人等の到着以前に済ましておく。

イ 集会所を、市ヶ谷から大久保(JR高田馬場駅から徒歩6分)へ移転する。

(2) 在日米軍CFとの協調

横田基地等との交流を継続する。

(3) 自衛隊宣教会への協賛

2 国外活動との連携

(1) 2006年度インタラクシヨン(韓国,7.31-8.6)への参加

3名の予定者中2名が不都合な為、更に公募する。旅費支援一人5万円とする。

(2) AMCF及びACCTSとの連携

ドン・スノー氏等との情報交換を続ける。

3 聖書の学び

月例会でInductive Bible Studyを継続する。

4 会計

(1) 海外宣教師及びAMCF,ACCTSへの献金をする。

(2) 協力奉仕者への献金をする。

5 広報

(1) ニュースレターを年に三回発行する。

この際、広く会員からの投稿を起用して行く。

なお、会員で住所変更時は必ず一報頂く事とする。

(2) インターネット・ホームページの有効活用と内容の充実を図る。

6 祈り

コルネリオ会活動の進展のためには、祈りが不可欠との認識に立って意識高揚を図る。特に、防大生への福音活動に関しては当面は祈りを主体として行く。

役員人事

名誉会長	矢田部 稔
会長	今市 宗雄
副会長・総務	中野 久永
副会長	伊藤 忠臣
企画	加瀬 典史
広報	圓林 栄喜
会計	長濱 貴志

監査	中野 秀知
渉外	石川 信隆
顧問	滝口 徹太郎
教職顧問	金 学根
教職顧問	井草 晋一
教職顧問	徳梅 陽介

2005年度決算

(2005.9.18~2006.3.31) 決算

1 収入	前年度繰り越し	¥1,623,218
	献 金	¥269,671
	合 計	¥1,892,889
2 支出	講師・謝礼費	¥40,000
	ニュースレター作成・発送費	¥79,270
	新聞雑誌広告費	¥79,300
	事務通信費	¥9,195
	集会費	
	聖会・例会会議費	¥8,087
	雑費(振り込み手数料)	¥1,875
	献金(国内教会・自衛隊宣教会等)	¥10,000
	次年度への繰越金	¥1,665,162
	合 計	¥1,892,889

2006年度予算

(2006.4.1~2007.3.31)

1 収入	前年度繰り越し	¥1,665,162
	献 金	¥500,000
	合 計	¥2,165,162
2 支出	講師・謝礼費	¥120,000
	集会費	¥110,000
	(1)例会費(10回)	(¥70,000)
	(2)その他(他Gpとの合同集会)	(¥10,000)
	(3)聖書研究会	(¥30,000)
	ニュースレター作成・発送費	¥80,000
	新聞雑誌広告費	¥60,000
	事務通信費	¥40,000
	慶弔費	¥20,000
	接待交際費	¥60,000
	研修参加費(韓国 Interaction)	¥50,000
	雑費(振り込み手数料)	¥5,000
	献金(インタラクシヨン等参加支援等)	¥100,000
	予備費	¥1,520,162
	合 計	¥2,165,162

コルネリオ会 (JMCF)
(防衛関係キリスト者の会)
 コルネリオ会広報室
 〒895-0041 鹿児島県薩摩川内市隈之城町 215-4-2-24
 電子メール:enrin@m9.dion.ne.jp
 郵便振込口座 00130-3-87577 コルネリオ会
 コルネリオ会ホームページ:
<http://www.geocities.jp/samuell1/index.html>